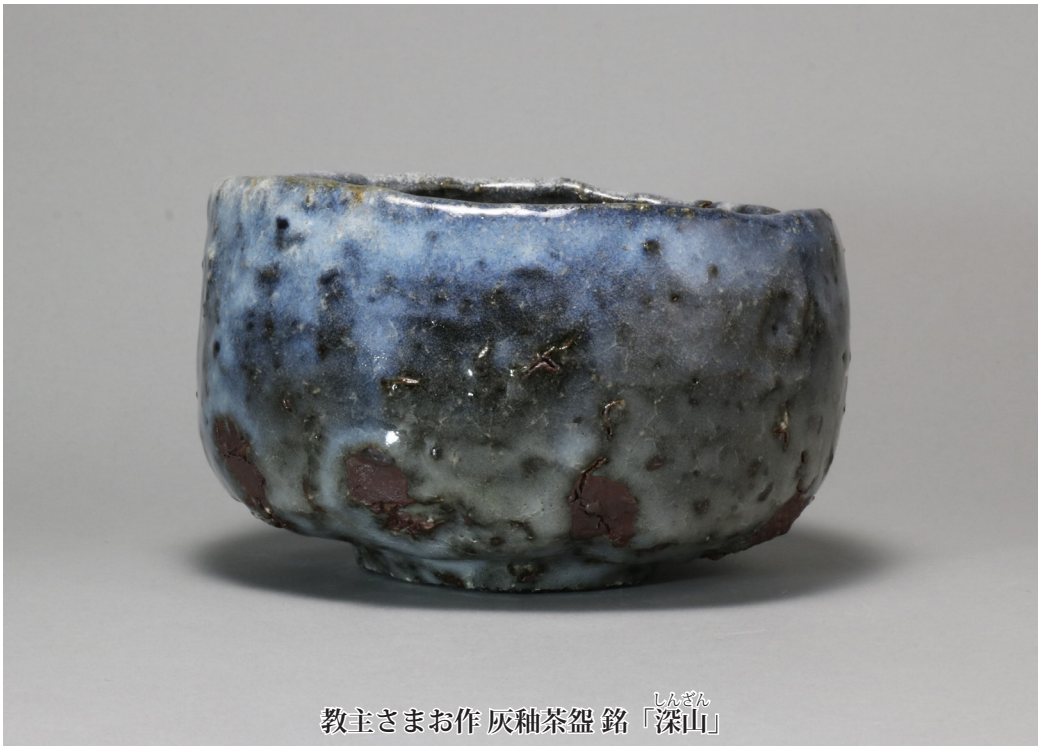
平成30年（2018）
阿づまの光
2月号・Februaro



教主さまお作 灰釉茶盌 銘「深山（しんざん）」

【高熊山土　月宮宝座松釉】

大本東京本部 開設50周年

題字 出口直日

通巻第587号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

和歌（わか）の徳言葉（とくことば）のひかりに天地（あめつち）も
動（うご）きてなびくうまし神国（かみくに）

出口王仁三郎聖師

真の花咲く実り多き一年に

関東教区特派宣伝使　宮原雅博

枝片（えだきれ）など積みたるなかに巣籠（すごも）りて鵜（う）のをり黒き半身（はんしん）を見せて

鵜の鳥の巣籠るさまも見て帰る春寒き池を一めぐりして

このお歌は三代教主さまのお作で、昭和29年、首都・東京に「大本東京本苑」が立ち上がったころ、不忍池をご散策になりながらお詠みになったお歌です。

東京本苑は、「大本が丹波の一教団として埋木の現状に甘んじているのが本当というのならば別ですが、神さまのおっしゃる通りになるのなら、何といっても地の利を得なければご神業は進みません」との三代教主さまのお気持ちを受けられ、関東を中心とする全国の信徒の皆さまの真心により完成いたしました。台東区池之端の場所も三代教主さまが御自らご指定になりました。戦後間もない、物資の乏しい時代のことでもあり、本苑建設は決して容易なことではなかったと想像します。

東京本苑完成後、三代教主さまは、関東教区役員の方々に次のようにお話しになっています。

「東京にいよいよ本苑の出来ましたことは、私の胸に、希望とよろこびを吹き込んできます。それがどんなささやかな家居（かきょ）であっても、そこに聖（きよ）らかな真の花を咲かし、それから私たちの力に応じてだんだん実を結んでゆきたいと思っています。ここに神さまの本当のお光をいただきたいと念じています」

その後、〝真の花〟は大きく実を結び、昭和43年、東京本苑が東京本部として発展。本年、大本東京本部開設50周年を迎えることとなりました。

50周年の佳節を契機に、設立の原点に立ち返り、どのような小さなことでも、大本のお道のために積極的に取り組ませていただき、真の花咲く実り多き一年になりますよう、皆さまとともに邁進してまいりたいと存じます。

ポテンシャルの引き出し方

～自己魂を練る～

出口王仁三郎聖師が「人は神の子、神の宮」と説いたように、人は神から肉体と魂を与えられています。魂は四魂に分けられ、それぞれが良い方面へ発揮されると明日への意欲と活力が充実してきます。魂を向上させるにはどうしらたよいのかを紹介します。

ポテンシャルという言葉は、「発展・発達の見込みのある」「潜在的な」という意味ですが、一般的には「潜在的な能力」「可能性としての力」という意味で、例えば、「あのチームは高いポテンシャルを持っている」「この新しいシステムは高いポテンシャルを秘めている」というように使われます。

このように私たちは、一人残らず潜在的な能力、可能性というものを持っています。それはどこに存在するのかと申しますと、私たちの心、「魂」にあります。

大本では、魂とは自分の本体そのものであると教えています。どんな宝石でも磨かなければ光らないように、魂もまた磨かなければ光りません。

では、魂を磨くにはどうすれば良いのでしょうか。

一霊四魂の働き

魂の中味をさらに詳しく説明すると、一霊四魂といいます。「一霊」とは「直霊」といい、「四魂」とは「荒魂・奇魂・幸魂・和魂」という四つの魂の働きのことを指します。

直霊は別名「直日の御魂」といい、心を映し出す鏡、良心であり、これが四魂の働きを統括しています。

四魂の荒魂は「勇」の働きです。進展とか進化、決断力、行動力などをいいます。耐え忍ぶという働きも荒魂です。

奇魂は「智」の働で、物事を巧みにする技術や、感性、察する、悟るという働きをいいます。

幸魂は「愛」の働きで、世のため人のため働く、造り出す、生み出す、育てるなど、自分以外のために何かをしようとする働きです。

和魂は「親」の働きとなります。平安にする、身を修める、ととのえる、国を治める、交わるなどの働きになります。

この一霊四魂はすべての人が持っていますが、その働きに得手不得手があります。

荒魂が優れている人は決断力や行動力に優れていますが、荒魂が足りない人はやはり優柔不断であったり、すぐに諦めてしまいやすい傾向にあります。奇魂がたけている人は感覚が優れていたり、一を見て十を知るということがあります。幸魂の優れている人は愛情が豊かな人です。和魂が秀でている人は、リーダーシップを発揮したり、人との和を取り持つことが大変上手だと思います。

「省みる」こと

それぞれに自分の得意なところを伸ばして、苦手なところを克服していくことが一霊四魂の練磨であり、ポテンシャルを引き出すことにつながります。

ただし、気をつけなければいけないことがあります。

それは、いかに荒魂を働かせても、自分の意思を押し通そうして過ぎると、かえって「争い」を生んでしまいます。和魂の場合は親しみを生む魂の働きですが、自己本位になってしまって、結果的に「憎しみ」に変わってしまいます。幸魂が過ると、むやみに人を傷つけたり、奇魂は正しく悟る力が消えて善悪正邪理非曲直の判別が狂ってしまいます。

四魂を正しく働かせるためにはどうすればよいのか、それは「省みる」ということです。その働き、役割が「直霊」の中に備わっているのです。でも「省みる」を怠れば「直霊」も「曲霊」に変わり、四魂の働きを失わせてしまうのです。

直感力を磨く

魂の働きと申しますと、「霊感」的なものを思われがちですが、決してそうではありません。大本では「霊感」と「霊覚」を区別して考えています。霊感とは、見えないものが見えたり聞こえたりという能力のことです。本来は見えない、聞こえないのが当然であって、そうしたものに興味を抱くことは、かえって間違いに陥りやすいと教えられています。逆に「霊覚」は誰しもが授かっているもので、いわゆる直感力です。これは大いに磨かなければなりません。大本教祖・出口王仁三郎聖師は、

「霊覚というのは、いわゆる神は愛善だから、神の心をさとったのが霊覚だ。『ほとけ』とは覚者ということで、愛と善とが徹底したのが霊覚なのだ。神さまを見たとかなんとかいうのは霊感だ」（『神の国』昭和28年8月号）

また、大本三代教主補・出口日出麿尊師は、

「正しい霊覚は神格の内流である。霊眼霊耳にとらわれると迷信におちいりがちだ」（『信仰覚書』第6巻）

と示されています。

大人の知恵と赤子の心

大本では最初にパッと思ったこと、初一念というものを大事にしなさいといわれます。これが直感力です。内流とも表現します。

でも、この初一念を実行することはなかなか難しい。せっかくの内流を自分の思い込みのために失ってしまうことがあります。私は本部の先輩から、よく「思

～21世紀・生きがい講座～

小藪（こやぶ） 資史（もとふみ）（大本本部 特派宣伝使）

い込みを捨てて思いつきを拾いなさい」と教えていただきました。

では、正しい内流、インスピレーションを得るためにはどうすればいいか。それは、赤子のような純な心を持つことです。

私たちは成長するにしたがって、さまざまな体験を経て、理性や知性いうものを培っていきます。そのことを大切にしながらも、それにとらわれない心が赤子の心であり、大人の知恵と赤子の純粋さを養っていくことが、直感力を高めていくことにつながります。

クセを直す

人はそれぞれにクセを持っています。それは体的なクセもありますが、心のクセがあります。例えば、物事に執着する、人の悪いところばかりが目につくのもクセです。何でもネガティブにとらえたり、人の言葉を悪く取ったり、ひがみやすかったり、嫉妬するなど、すべて心のクセです。

心のクセは自分ではなかなか気づきません。また分かっていてもなかなか直せない。「あなたにはこういうクセがありますよ」と注意されても、「失礼な！」となってしまいがちです。自分の心のクセを指摘してもらえるのは、本当はありがたいことなのです。

出口日出麿尊師は、「心の慣（かん）、クセを省みて注意しなくては進歩しない」と述べ、「自分の悪い慣を一つ直した人は、大変な宝の塔を建てた人、一つの世界を改造した人といってもよいのであります。人間の一生は、ある意味において、慣を直すことである。悪い慣をなおし、良い慣をますことであります」（『信仰叢話』）と、お示しくださっています。

遮二無二なせ

クセを直すことは生涯に渡り大切な課題であることがわかります。

そのためにも、一霊四魂を正しく働かせ、積極的に向かっていくことが大切です。出口日出麿尊師は、「消極は地獄であり、積極は極楽である」と教えています。

無理からでも為（な）せ　遮二無二（しゃにむに）進め
なんでもかんでも音を立てよ
思いに思い　言いに言い　なしに為せよ
消極は地獄であり
積極は極楽である
瞬時も休むことなく宇宙はまわる
何事でもよい　思い立ったことを
全力をあげて　全心をかたむけて
全身の全細胞にねじ鉢巻をさせて
全身の全血管に波立たせて
見かけはどんな卑しいことでもよい
見かけは遊戯のように
　見えることでもよい
面白く愉快に興味にみちて
為しさえすれば真（まこと）の生活だ
理屈はどうでもよい
他人はどう解しようがままだ
したいと思うことを
為（せ）ねばならぬと決意したことを
いま目のまえに出て来たことを
ドンドン為せよ
つぎつぎに為せよ
遮二無二為せよ
なせよ為せよ　なすのが生活だ
（『信仰覚書』第6巻）

どんなことでも一度はやってみる。やっていくうちに、失敗もするし反省もする。そして徐々に二度と失敗しないように悟っていくわけです。「習うより慣れよ」との言葉のとおり、畳の上でいくら水泳の練習をしても、実際に水に入らなければ泳げないのは永遠の真理です。

望み、為し、省み、悟れ

今よりも一歩先へ進んでいこうという気持ち、大本では進展主義と表現します。進展には二つの形があります。一つは階段を一歩ずつ登っていくように、一つ一つ段階を経ていく。もう一つは、螺旋（らせん）を描きながら向上していきます。いつまでも同じ、いつも同じことを繰り返しているようですが、ちょうど、春、夏、秋、冬が過ぎると次にまた春が巡って来るように、でも去年の春とは違う。一年進んだ春になっているのです。

また、私たち人間は神と獣の間にあります。神にもなれるし獣にもなれる。身体の造りだけを見れば他の動物と何ら変わらない。けれども神性が宿っているのです。獣性を克服して神性を開発し、地上の神としてはたらける素質、可能性を持っているのです。まさしく、ポテンシャルを与えられているといえるのです。

最後に出口日出麿尊師の詩を紹介してお話を終えます。

間断なく望み
間断なく為し
間断なく省み
間断なく悟れ！
そしてまた新しく望み、
為し、省み、悟れ！
かくて極まりなからんとき
われらは向上して極まりなし
（『信仰覚書』第5巻）

掲載文は、平成29年9月20日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭・成人式典

東光苑月次祭・成人式典は1月14日午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、３４０人が参拝した。

祭員は福島・群馬・栃木・山梨・東京・神奈川各主会の有志が、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読は関谷壮一千葉主会長、添釜は髙野社中が担当した。

祭典後、祝言、新年にふさわしい「暁山雲」の奉納。ついで鈴木穎一本部長があいさつし、新成人へ「青年は教団の宝、成人を機に、大本信徒としてのみ教えをより深めていただきたい」と述べた。

続いて堀孝三大本青年部副部長があいさつして成人式典にうつり、新成人の齋藤盛子さん（茨城）、成嶋奈美さん（茨城）、高橋ルウクさん（茨城）、渡辺咲さん（東京）、八板満彦さん（神戸）、新谷咲太さん（神奈川）、大久保照子さん（口丹波）を紹介。続いて渡辺弘子直心会関東教区連合会長から祝辞、記念品が授与され、齋藤盛子さんが答辞を述べた。その後、新成人は添釜に入席し、関東教区青年部主催による「成人祝賀会」に出席した。

成人おめでとうございます

東光苑新年祭

平成30年東光苑新年祭は、元旦の午前7時から、斎主・猪子恒東京宣教センター長のもと執行され、73人が参拝した。

祭典後、教主さまのお写真に年賀のごあいさつを参拝者全員で申し上げた後、教主さまの新年ごあいさつを拝聴。引き続き猪子センター長が年賀あいさつした。

ご神前では年賀交換としてお神酒が、食堂では直会として神代餅（かみよもち）が接待され、ギャラリーおほもと（東光苑）へも大勢が立ち寄り、新春のご神徳に浴した。

東光苑春季祭式講習会

日　程　3月23日（金）午前9時30分（9時受付）
～25日（日）午後4時ごろ閉講予定

会　場　東京宣教センター

内　容　○初級クラス　基本作法から月次祭まで
○中級クラス　基本作法・月次祭
・大神鎮座祭・庭上祭など

定　員　40人（宿泊定員40人）

参加費　1人1,000円
※食事・宿泊代は別途徴収いたします

持ち物　笏、大本祭式の本、帯または紐（懐笏時に必要）、祭式講習会資料、筆記用具、動きやすい服装、足袋（あれば履く方が動作が容易）、宿泊用品
※笏は稽古用を貸与可能

申込み　取得認定級、受講クラス、食事・宿泊を明記の上、祭務課「春季祭式講習会」宛へお申込み下さい

締切り　**3月18日（日）**

東光苑七草粥

東光苑七草粥は1月7日、午前10時30分から午後3時まで行われ、日曜日に重なり２５５人が入席した。

当日は関東教区直心会ご奉仕のもと、七草粥をはじめ、おすましや柚味噌など、真心のこもった席が設けられ、和装姿の直心会員らが入席者を温かくもてなした。

また、茶室・東光庵では髙野社中による薄茶の接待も行われた。

21世紀・生きがい講座

第１７９回「21世紀・生きがい講座」は、1月17日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、猪子恒東京宣教センター長が「没後１００年　大本開祖・出口なおの生涯に学ぶ」と題して講話した。参加者は32人（内、一般6人）。

講師は「開祖・出口なおは、明治という世界中が戦争へと巻き込まれてゆく混沌とした時代の中で、ひたすらに大難を小難に、小難を無難にと大神さまに平和を祈願された」と語り、大神さまの〝差し添え〟として人民に対しいかに期待をかけ、改心を祈られたかを説いた。

参加者からは「神さまが帰神された開祖さまのお姿に加え、人としての開祖さまの立派な人柄がよくわかりました」（男性・一般）等の声が寄せられた。

東光苑祭典・行事予定

2月

3日（土）午後6時30分執行
開教１２６年 節分大祭遥拝祭
二代教主・四代教主聖誕祭

11日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・豊年祈願祭
市杵島姫命例大祭

21日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題　王仁三郎の半生と高熊山修行
～入山１２０年をしのぶ～
講師　橋本伸作（東京宣教センター次長）

23日～25日（金～日）午前9時30分
教本講師・講師補認定講習会

24日・25日（土・日）午前9時30分
教本各級認定講習会

3月

11日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・交通安全祈願祭・
関東教区春季合同慰霊祭

21日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　王仁三郎と大本歌祭
～平和を祈る敷島の道～
講師　椎野恭三（祭務課主幹）

23日～25日（金～日）午前9時30分
東光苑春季祭式講習会講習会

31日（土）午前10時30分執行
二代教主毎年祭（66年）

31日（土）午後1時30分～
東光苑観桜茶会